

2021年12月5日（日）主日朝礼拝説教

『あけぼのの光』井上隆晶牧師
イザヤ40章1～5節、ルカ福音書1章67～79節

アドヴェントの第二週になりました。今週はザカリアの賛歌についてお話をしましょう。祭司ザカリアと妻エリサベトには約束されたとおり男の子が生まれ、ヨハネと名付けられました。ザカリアは口が利けるようになり、聖霊に満たされて預言をします。それが1章68～79節に載せられています。この預言はラテン語で「ベネディクトゥス」（1節の「ほめたたえよ」から取られた）と呼ばれています。彼はこういいました。

①【聖なる契約を覚えていてくださる神】

「ほめたたえよ、イスラエルの神である主を。主はその民を訪れて解放し、我らのために救いの角を、僕ダビデの家から起こされた。昔から聖なる預言者たちの口を通して語られたとおりに。」（68～70節）神は預言されたとおりに来てくださり、救い主を起し、私たちを解放して下さったというのです。「救いの角」というのはイエス様の事です。角は力の象徴として用いられています。「主よ、わたしの力よ、わたしはあなたを慕う。…主はわたしの盾、救いの角、…」（詩編18:2～3）では何からの解放でしょうか。それは「罪、悪（人）、死、恐れ、偶像など」からの解放を意味しています。

「主は我らの先祖を憐れみ、その聖なる契約を覚えていてくださる。これは我らの父アブラハムに立てられた誓い。」（72～73節）神様はその昔、ご自分が選んだ一人の信仰者アブラハムと約束をされました。それはどんなものかという、「あなたを豊かに祝福し、あなたの子孫を天の星のように、海辺の砂のように増やそう。あなたの子孫は敵の城門を勝ち取る。地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福を得る。」（創世記22章16～18節）というものでした。「あなたの子孫」というのがイエス様の事です。イエス様は敵を破り、すべての国民はイエス様によって祝福に入るという約束です。その約束をずっと覚えていてくださって、それを守って下さったという事を言っているのです。神が一度、約束したならば何年経とうが、どんな悪い条件であろうが、ゼロからでも必ず起こすのです。「覚えていてくださった」という言葉はうれしい響きです。人間が神様との約束を忘れても、神様は人間との約束を忘れないということです。人間が神様の約束を守れなくても、神様は人間と約束されたことを守ってくださるということです。私たち人間というのは弱いものです。忘れるし、いい加減です。つまりあまり頼りにならないということです。でも神様は違う、頼りになる、誠実な方です。どちらが確かかという、人間ではなく神様の方です。だから信じてもいいのです。イエス様はこう約束されました。「私のもとに来る人を、私は決して追いつかない。」（ヨハネ6:37）

●新型コロナ感染者数が減ってきましたので、久しぶりに平方先生のところに行き 15 分だけの面会を許してもらいました。聖餐式の準備をすると、先生は「聖餐式ですか。久しぶりやわ」と喜んでくださいました。聖餐のお祈りや、制定の言葉を読むたびに、先生は横で頷いておられました。その姿を見ると、涙が出てきました。コロナによって外出することも禁じられ、礼拝に参加することもできませんでしたが、こうして礼拝をし、聖餐をすると元の先生に戻られるのです。その信仰は弱ることなく神様が守っててくださいました。

先生はもう歩けず、耳も遠くなり、人間的にはどんどん出来ることが減ってきていますが、神様の約束と愛は変わることがありません。それが何とも嬉しいのです。人間が弱くなればなるほど、神の強さと、確かさがはっきり見えてくるからです。

②【洗礼者ヨハネの使命とは】

76～77 節では洗礼者ヨハネの使命のことが預言されています。「幼子よ、お前はいと高き方の預言者と呼ばれる。主に先立って行き、その道を整え、主の民に罪の赦しによる救いを知らせるからである。」ヨハネは神から来た預言者であって、救い主キリストに先立って行き、キリストへの道を準備させるという働きが与えられました。ヨハネの事はイザヤ書で預言されています。「荒れ野で叫ぶ者の声がある。主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。谷は埋められ、山と丘はみな低くされる。曲がった道はまっすぐに、でこぼこの道は平らになり、人は皆、神の救いを仰ぎ見る」(ルカ 3：4～6) 高慢な人は謙虚になれ、絶望していた人は希望を持って、心が定まらず迷っている人はまっすぐに歩め、救い主への道をまっすぐに歩め、というのです。人間が医者に行くためには、自分の病気を自覚し、良くなりたく願わなければなりません。心の病の勉強会で「病感はあるが病識がない」ということを学びました。みんな自分は何かおかしいということ(病感)は薄々分かっているのですが、大変な病気であって治療が必要だという事(病識)はなかなか受け入れないのです。だからヨハネは荒野で叫んで人の罪を暴き、それを厳しく問います。「蝮の子よ、神の怒りを免れると誰が教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。良い実を結ばない木は切られ火に投げ込まれる。」(ルカ 3：7、9 参照) 人間って、結構自分はましな人間だと思っています。もっとひどい人間がいると思っています。

●昔、あるご高齢の男性が榎本保郎牧師の教会に来られていましたが、ある時から、ぷつぷつと来られなくなりました。暫くして再び榎本牧師の所に来られた男性に榎本先生は「どうしてこられなくなったのですか」と聞かれたそうです。すると彼は「先生は罪についてははっきりと教えて下さいませんでした。だから他の教会に行って洗礼を受けたのです」と言われたそうです。

教会は確かに恵みを伝える所です。でも恵みを本当に感謝して受け入れるためには、自分の罪を知ることが必要なのです。キリストの十字架と復活を知りながら

それが力にならないのは、罪の恐ろしさについて教会が言わなくなったからだと思います。この教会が貧しく小さな伝道所からやっと第二種教会になった時には、天に上るような嬉しさがありました。貧しさを知ったからこそ、豊かにされた喜びも大きかったのです。自分の罪を知ること、これが救いの第一歩なのです。それは「神の憐れみの心による」(78)と書かれています。自分の罪を知るために、この世の様々な苦難、挫折、病気があるのかもしれませんが。それは神があなたを憐れんでいる証拠なのです。

③【あけぼのの光が我らを訪れた】

79節に「この憐れみによって、高い所からあけぼのの光が我らを訪れ、暗闇と死の陰に座している者たちを照らし、我らの歩みを平和の道に導く。」とあります。この「あけぼのの光」とは夜明けの光のことで、キリストを指しています。それが上ると徐々に周りは明るくなってきて、反対に闇は少しずつ消えてゆくのです。イエス様という光は、暗黒と死の中に絶望して座り込んでいる人たちを照らして希望を与えてくるのです。

●日本YWCAの季刊誌に以前、礼拝でお話したシロアムの園の代表、公文和子医師の記事が載っていました。ケニアで障がいのある子供たちに出会い、「人に仕え」なくても、共に生きればいいのだと気持ちが軽くなり、障がい児のための「シロアムの園」を始めました。そこに脳性麻痺のジェフ君が家族として加わってきます。ジェフ君は視覚や聴覚が機能していないのかと思うほど反応が無い時があり、表情もほとんどありませんでした。2016年のクリスマス降誕劇では、彼は飼いの葉桶で眠るイエス様の役をしましたが、クラスメートたちが1～2年の内に次々と亡くなります。3年間リハビリやグループ療法をしたにも関わらずジェフ君には明らかな改善が見られず、お母さんは希望が見えなくなっていました。ところがスタッフたちと話すことを通して、お母さんは諦めず共に歩むようになり、最近ではジェフ君は、嬉しい時には素晴らしい笑顔を見せてくれるようになりました。公文医師はこう書いています。「先が見えない暗闇の中にある時に希望を持つことはとても難しいことです。暗闇では予測のつかない未来に対する不安に心が奪われ、予測もつかないまま「待つ」という苦痛を体験します。その時に、一緒に待ってくれる人、心配してくれる人、心を込めて寄り添ってくれる人、愛してくれる人がいることによって、希望が生まれます。そして、その希望が、寄り添う人にも希望を与えるのです。「共に生きる」とはそのように希望を与えあう関係だと感じます。」と書いていました。

先が見えない暗闇の中で、私たちが希望をもって待てるためにも、一緒に待ってくれる人が必要なのです。イエス様は、世の終わりまであなたがたと共にいる、と約束をして下さいました。キリストは私たちを決して見捨てず、一緒に神の国を待つ人となってくださったのだと思います。

冬至という最も夜（暗闇）が長くなる時に、光であるイエス・キリストの誕生であるクリスマスが訪れるのは、神様の不思議な業でしょうね。どんなに闇が深く

見えても、決して絶望してはいけないよ、と教えているのだと思います。闇の世界を見つめてはいけません。光であるキリストを見つめるのです。共にいてくれる方は、とても心強い方、底知れぬ愛をもつお方、もっとも確かなお方です。キリストに確かさを見るのです。もっとも確かな方が共におられるなら、周りが闇でも大したことではないのです。そこにこそ信仰と希望があります。